

- ・日本合成化学工業が酢酸エチルを2月1日出荷分より値上げ
- ・出光興産がポリカーボネート樹脂を2月1日出荷分より値上げ
- ・出光興産が石油製品の1月分の卸価格改定幅を発表(2月1日)



◆海外市場調査の Web サイト『グローバルマーティンラボ』を新設しました

<http://www.global-marketing-labo.jp>

近年のマーケティングの対象は国内市場中心からグローバル市場へと広がっております。

弊社では、グローバル市場においても足で稼ぐ生きた情報を収集すべく、充実した社内体制と外部ネットワークを構築し、多数の海外調査を実施しております。

『グローバルマーケティングラボ』では、工業市場研究所の海外調査のメニューの紹介や調査実績、各国情勢コラムを掲載しております。調査実績、海外情勢コラムは随時、更新を行っておりますので、是非、ご覧ください。

海外市場調査にご興味のある方は、TEL:03-6459-0165 又は
<http://www.global-marketing-labo.jp/contact/> までご連絡下さい。

----- WEEKLY NEWS -----

◆自動車部品：豊田合成と日本化薬が協力強化に向けて資本提携(2月2日)

豊田合成と日本化薬は、エアバッグ事業などにおける協力関係の強化に向けて資本提携することに合意したと発表した。

両社は、従来からエアバッグの主要部品であるインフレーター(ガス発生装置)などの取引で良好な協力関係を築いてきた。現在、エアバッグは世界各地における安全規制強化を背景に需要が急拡大していることから、今回の資本提携を機にグローバルでのエアバッグの安定的な供給・品質保証体制の強化を図っていく。

また自動車産業は自動運転や電動化の進展など大きな環境変化の中にあり、安全分野に加えて新素材の分野でも連携し、将来を見据えた製品開発を進めていく予定としている。

◆フィルム：東レが高い熱伝導性を備えた革新 PET フィルムを開発(2月1日)

東レは、従来の二軸延伸 PET フィルムのもつ特性(絶縁性、ハンドリング性、加工性)を保持しつつ、PET フィルムとしては世界最高レベルとなる、従来品比

約 2.5 倍の高い熱伝導率をもつ二軸延伸 PET フィルムの開発に成功したと発表した。

フィルムの熱伝導性を向上させるためには、PET 中に、絶縁性と共に高い熱伝導性を有する無機粒子を多量に含有させることが有効である。しかし、無機粒子と PET が接する界面の密着力が低く、剥離が生じて熱伝導性の低い空隙がフィルム中に多数形成される。そのため、二軸延伸 PET フィルムの高熱伝導化は不可能と考えられていた。

今回、東レは、粒子表面処理技術により無機粒子と PET 樹脂の界面密着力を向上させた。さらに、ナノレベルで PET の構造を制御し、二軸延伸の工程中で、熱伝導の阻害要因となる空隙の発生を大幅に低減させることに成功した。

同社では、本開発品を絶縁材料、電池材料、回路基板など放熱や熱を伝えることが必要とされる用途へ適用することで、エネルギー利用効率の向上や部材の寿命向上などが期待できると考えている。現在、パイロットスケールでの技術確立が完了し、ユーザーへのサンプル提供を開始している。

◆複合材料:カネカがヘンケル社の航空機用複合材事業を買収(2月1日)

カネカは、米州グループ会社である Kaneka Aerospace LLC(以下 KAE)が、Henkel Corporation(以下 Henkel)と、同社のベンゾオキサジン樹脂を用いた高機能複合材事業の商権や技術、特許などに関する譲渡手続きを完了したことを発表した。

今回買収した事業には、ベンゾオキサジン樹脂を用いたプリプレグ、フィルム接着剤、インフュージョン成形樹脂が含まれており、航空機市場での採用実績がある。競争力のある製品や技術をポートフォリオに加えることで、航空・宇宙分野への事業展開を加速している。

カネカは、本買収後も更なる M&A や提携を継続的に実行し、同社グループのグローバルな R&D 資源を最大限に活用した研究や製品開発を推進することで、2025 年には航空・宇宙分野の高機能複合材領域において売上高 200 億円を目指すとしている。

◆フィルム:JNC がペイントプロテクションフィルムの新ブランドを立ち上げ(2月1日)

JNC は、ペイントプロテクションフィルムを新ブランド「JN-SHIELDTM」として立ち上げたを発表した。

ペイントプロテクションフィルムとは、飛び石(チッピング)、泥汚れ、虫の死骸、鳥糞、悪戯などから自動車のボディを守るフィルムであり、アメリカ、欧州、中国、東南アジア諸外国では、高級車向けとして使用数量も増加しており、今後

も期待されている成長市場の製品である。JNC のペイントプロテクションフィルムは、独自のケイ素合成技術に基づいた特殊な表面処理を施しており、自動車に施工後は高い光沢感と高い撥水性能を長期に維持する「撥水(防汚)グレード」と、真鍮ブラシを擦り付けても傷は瞬時に回復するといった高い機能を保持している「自己修復グレード」の 2 グレードをラインナップしている。

今後、ペイントプロテクションフィルム新ブランド「JN-SHIELD」はブランディング戦略の中で積極的に宣伝広告、スポンサー等を展開し、市場の拡大、シェア獲得を目指すとしている。

◆電子材料:三井金属が積層セラミックコンデンサ向け銅超微粉の生産能力の増強を決定(2月1日)

三井金属は、積層セラミックコンデンサ(以下 MLCC)向け銅超微粉の生産能力を約 40%増強すると決定したことを発表した。

同社の銅超微粉は、湿式還元法により精製したサブミクロンから数ミクロンの銅粉であり、彦島製錬(株)機能粉工場(山口県下関市)にて製造している。

近年は、主にスマートフォンの高機能化による MLCC 搭載個数が増え、銅超微粉の需要も増加している。さらに、Society5.0 の実現に向け、家電や産業界での IoT 化や自動車の ADAS 等による電装化が進展することが予想されることから、MLCC の需要がますます拡大していくものと期待されている。

同社では、この旺盛な需要に対応すべく、新たに銅超微粉の製造ラインを増設することにより、生産能力を約 40%増強し、2018 年 9 月から稼働開始する予定としている。

◆樹脂:日本ポリプロがポリプロピレン製造設備の復旧を発表(1月31日)

日本ポリプロは、平成 29 年 10 月 6 日に停止を発表した鹿島工場のポリプロピレン製造設備の損傷箇所補修工事を完了したため、1月24日より、運転再開したことを発表した。

◆複合材料:日本製紙が富士工場に新しい機能性材料「ミネルパ」の実証生産設備の設置を決定(1月31日)

日本製紙は、同社独自のパルプ改質技術により、微粒子化した無機物(無機粒子)と木材パルプ(セルロース繊維)を複合化する新しい機能性材料、「ミネルパ」の実用化を推進するため、富士工場に実証生産設備を設置することを決定したと発表した。

「ミネルパ」は、表面が無機粒子で覆われた木材パルプ(セルロース繊維)で、これまでにない新しい機能性材料としている。同材料は、さまざまな無機粒子が

持つ機能性の効果を発現することはもちろん、木材パルプ(セルロース繊維)としての特長も生かせるため、ウエットパルプ、シート、ボード(貼り合わせ)、パウダーなど、さまざまな形状に加工することができ、また無機粒子の配合率を最大 90%まで高めることができる。同材料は、今後幅広い分野での用途開発が期待できるとしている。

今回新設を決定した「ミネルパ」の実証生産設備は、2018年10月に稼働する予定で、年間450トン以上の生産能力を持ち、事業化へ向けた本格的なサンプル供給体制を整える。今後は実証生産設備の導入により、将来展望が期待できる事業分野の探索と、スピーディーな用途開発を積極的に進めていくとしている。

◆樹脂:東亜合成がタイ子会社の工場操業開始を遅延(1月31日)

東亜合成のタイ子会社である トウアゴウセイ・タイランド・カンパニー・リミテッドは、現在、アクリル系ポリマー工場の建設を進めているが、設計期間の長期化などから操業開始が当初予定していた2018年1月から6月に遅延する見込みとなったと発表した。

◆樹脂:クオドラントグループが日本におけるライフサイエンス事業の本格展開を開始(1月30日)

三菱ケミカルの子会社であるクオドラント AG は、日本法人であるクオドラントポリペンコジャパン(以下「QPJ」)を通じてライフサイエンス事業の本格展開を開始すると発表した。

人工関節用の緩衝剤として使用される超高分子量ポリエチレン「チルレン」や、医療器具・手術器具に用いられる生体適合性エンジニアリングプラスチックなど、これまで欧州、米国を中心に展開してきたライフサイエンス分野向け高機能プラスチック素材について、QPJ が日本国内において販売を開始する。

クオドラントグループの生体適合性エンジニアリングプラスチックシリーズ『ライフサイエンスグレード』は、医療機器の生物学的安全性評価の国際規格である ISO10993 の認証を取得しており、こうした安全性に加え、樹脂の持つ軽量性、X線透過性、さらには耐摩耗性、摺動性、耐薬品性などの特徴を有し、さまざまな医療機器部品への対応が可能である。

日本国内への展開は、三菱ケミカルの中津事業所内に QPJ が有するテクニカルサポート部門を通じて、医療機器メーカーなど用途に合わせた最適な素材の提案等のサポートを提供していくとしている。

◆水処理膜:三菱ケミカルが MBR 水処理膜が韓国の半導体工場排水処理設

備に採用(1月30日)

三菱ケミカルの膜分離活性汚泥処理法(MBR法)用の水処理膜が、韓国の半導体販売会社の半導体工場向けの排水処理設備に採用されたことを発表した。産業排水用のMBR法設備として世界最大級(一日当たりの処理量が10万m³超)の規模である。

三菱ケミカルの100%子会社で、排水処理・水ろ過装置を手掛ける三菱ケミカルアクア・ソリューションズが本設備を建設する韓国の現代エンジニアリング社に水処理膜を納品する。

今回の採用は三菱ケミカルアクアが独自に開発した水処理膜のエLEMENTとモジュールの特長である省スペース化と省エネルギーを実現したことと、半導体工場向け排水処理におけるこれまでの採用実績で培った実績が評価された。

三菱ケミカルはMBR法設備用の水処理膜事業を海外で積極展開し、アジアでは半導体工場のほか中国で農村集落排水や産業排水に注力するとしている。

◆フィルム:アイカがハードコートフィルム「ルミアートHCシリーズ」を発売
(1月29日)

アイカ工業は、高い伸び率と耐摩耗性を両立した自動車内装向け3次元加飾用ハードコートフィルム「ルミアートHCシリーズ」を4月に発売することを発表した。

自動車内装に使われるスイッチパネルやインストルメントパネルなどのプラスチック加飾部品には、これまで水圧転写とスプレー塗装が用いられてきた。しかし環境への配慮から、近年では塗装代替としてアクリルフィルムを用いた熱成形手法が用いられている。また、3次元加飾成形方法では、成形体の複雑な形状に対応するため、アクリルフィルムに高い伸び率が要求されるが、日焼け止めクリームで溶解するなど、耐久性に問題があった。

同社は伸び率と耐摩耗性を高い次元で両立したUV硬化樹脂の開発に成功し、「ルミアートHCシリーズ」として上市する。伸び率250%と硬さを両立したUV硬化樹脂をアクリル等のフィルムにコーティングし、自動車内装部品の印刷加飾メーカーなどに提供していく。年間販売目標は3億円としている。

◆接着剤:アイカ工業が耐熱性を大幅に改善した自動車フロアカーペット用ホットメルト接着剤を発売(1月29日)

アイカ工業は、従来品より耐熱性を大幅に改善した自動車フロアカーペット用のポリオレフィン系ホットメルト接着剤「アイカメルト Inmelt435MOD/C」を発売したと発表した。

従来のホットメルト接着剤ではエンジン周りで使用される場合、車種によってはカーペットが高温になり、耐熱性不足による剥がれの発生が課題となっていた。

そこで、アイカインドリア社(インドネシア)と共同で、耐熱性を大幅に改善したポリオレフィン系ホットメルト接着剤「アイカメルト Inmelt435MOD/C」を開発した。2017年より販売している従来品と比較して、高い軟化点を有しており、高温域においても接着強度を維持することが可能であると共に、常態(23℃)での接着強度や加熱安定性も向上した。

アイカインドリア社が生産を行い、アイカ工業の販売網を活用することで、日本を含むアジア地域を中心に拡販を狙う。年間販売目標は1億円としている。

◆価格改定

- ・アイカ工業が接着剤および建設用樹脂を3月1日出荷分より値上げ
値上げ幅は、10%以上
- ・JXTG エネルギーがベンゼンの契約価格を改定
2月契約価格は、955\$/t(前月比+70\$/t)、国内価格換算想定値は109.2円/kg
- ・日本合成化学工業が酢酸エチルを2月1日出荷分より値上げ
値上げ幅は、15円/kg
- ・出光興産がポリカーボネート樹脂を2月1日出荷分より値上げ
値上げ幅は、国内:90円/kg以上、輸出:0.8\$/kg以上
- ・出光興産が石油製品の1月分の卸価格改定幅を発表(2月1日)
油種別の改定幅は、前月比で、ガソリン+2.2円/L、灯油+2.2円/L、軽油+2.2円/L、A重油+2.2円/Lとしている。



株式会社 工業市場研究所

TEL:03-6459-0165 FAX:03-5408-1584

〒105-0003 東京都港区西新橋 3-6-10 マストライフ西新橋ビル

<http://www.kohken-net.co.jp>

◆メールの設定により、読み難くなる場合がございます。ご容赦ください。

◆配信停止・ご意見・お問い合わせはこちらへ h-ikeda@kohken-net.co.jp

